

睡虎地秦簡《語書》釈文注解(下V)

高橋 庸一郎

十、●惡吏不明灋律令、不智(知)事、不廉絜(潔)、毋以佐上、
綸(倫)隨(惰)疾事、易口舌、不羞辱、輕惡言而易病人、毋公端
之心、而有冒抵(抵)之治、是以善斥(訴)事、喜爭書。

●⁽¹⁾惡吏は灋律令に明かならず、事を知らず、廉潔ならず、以つて
上を佐けず、⁽²⁾綸⁽²⁾隨⁽³⁾にして事に疾し、口舌を易え、辱を羞じず、輕ん
じて惡言し人を病し易く、公端の心なく、⁽⁴⁾冒抵⁽⁵⁾の治有り、是れを以つ
て善く事を訴え、書を争うを喜ぶ。

(1) 文頭にあるこの黒丸は、全面黒ではなく左寄りの中心部に少し
白い部分が残っている。恐らくこれは書き損じによるものであろう。
この部分は文の切れ目ではあるが、これ程の黒点を置かねばならな
いほどの段落とは考えられない。また特にこの語書の前半部分には
文の切れ目にレ状の頓点がいくつか見られ、それ等はここに見える
黒丸とは形も位置も異っている。

(2) 智は『説文』で白部に𠂔でとり、「識詞也、从白、从𠂔、从知、

𠂔古文𠂔」(詞を識るなり、白に従い、𠂔に従い、知に従う、𠂔は
古文の𠂔なり)とある。知は『説文』で、「詞也、从口、从矢」(詞
なり、口に従い、矢に従う)とある。この両者の説解に共通するの
は詞であるが、この詞について『説文』は、「意内而言外也、从司、
从言」(内に意^{おも}いて、外に言うなり、司に従い、言に従う)とある。
段玉裁は、「有是意於内因有是言於外、謂之詞」(是の意を有しめ、
因りて是の言有らしむるは、これを詞と謂う)と注し、更に、「司
者主也、意主於内而言發於外故从司」(司は主^{つかさど}るなり、意は内に
於て主どり、言は外に於て發せらる。故に司に従う)と注している。
後半の解説に見える司は、主どるの意を持たせたものではなく、単
なる音符と見た方が穩当であらう。つまり詞とは「ことば」の意で
ある。そうすると、知とは、「ことばそのもの」を表わす名詞であり、
智は「ことばをしる」という動詞ということになる。しかし實際に
は『論語』の「溫古知新」(古きを溫ね新しきを知る)の知は動詞で、
決して言葉の意味ではない。また同じく『論語雍也』の「智者樂水、
仁者樂山、智者動、仁者靜、智者樂、仁者壽」(智者は水を楽しみ、

		カールグレン 中古音	カールグレン 上古音	周高法 中古音	周高法 上古音
知	平	tjæg	tiɛ	tjæə	tiɪ
智	去	tjæg	tiɛ	tjæə	tiɪ
支	平	tjæg	tɕɛ	tjieə	tɕiɪ
之	平	tjæg	tɕi	tjæə	tɕi
直	入	d'jak	djak	diək	diək
止	上	tjæg	tɕi:	tjieə	tɕi
制	去	tjad	tɕjai	tjiaɾ	tɕiæi
置	去	tjæg	ti	tjæə	ti
滯	去	d'jad	d'jai	diar	diæi
質	去	tjad	ti-	tier	tiɪi
治	平	d'jæg	d'i	diæə	di
志	去	tjæg	tɕi	tjieə	tɕi
至	去	tjed	tɕi-	tjier	tɕiɪi
指	上	tjær	tɕi:	tjier	tɕiɪi
執	入	tjæp	tɕjæp	tjæp	tɕiɪp
織	去	tjæg	tɕi-	tjieə	tɕi
脂	平	tjær	tɕi	tjier	tɕiɪi

仁者は山を楽しむ。智者は動き、仁者は静かなり。智者は楽しみ、仁者は寿なり。の智は言葉を知るという意味ではなく、動詞でもない。即ち『説文』の説解は、両者とも詞に係わりがあるという点では当を得ているようではあるが、その説解の仕方は些か納得のいかないものである。そこで今度は音の方から考えてみたい。知、智は、現代の中国語音としては、類似の音を持つ字としては、支、之、直、止、制、置、滯、質、治、志、至、指、執、織、脂などが考えられる。これらの文字の古代音を、周高法『漢字古今音彙』で見てみると次のようである。

こうして見ると、直、滯、治、執などはd音で少し異なるのであるが、支、之、止、置、織などは明かに同音である。これ等の字義に共通するものを総合してみると、「まっすぐに立って、つき出してくるもの」というような意味であろうか。即ちtjæg、tjægなどの音は、その音自身がこうした、直立、突出、などの意味を持っているということである。志は、心からまっすぐに出てくる意志を表わし、またそれが心に定着しているところから文字として書き表わすということも意味するようになったのであろう。そうすると、知や智の音である、tjægは頭脳の中からまっすぐに突出して来たものの、或いは突出して来て定着したもの、或いはそうした事を指すのであろう。そうすると知も智も結局は完全に借音表意の字であるということになる。『説文』の疒部にある疾の古文は、病となっている。これは智の古文と酷似している。疾は、カールグレンの中古音ではdʒiet上古音では, dʒiet また周高法ではそれぞれdʒiet dʒietであるが『広韻』では質の韻目に属しており、質は前掲の表に見る如くdʒietで韻尾は異なるものの韻頭声母は全く同じである。恐らく上古音としての知、智、疾は同音であったが故に疾字の古文として誤って智字の古文が入って来たのであろう。これは知、智が、假借の字であることを証明するものである。『説文』は、智字の下部の曰を白とし、白は『説文』に、「此亦自字也、省自者、詞言之氣从鼻出、與口相助、」(此の字は亦た自の字なり。自を省した者なり。詞言の氣は鼻より出で、口と相い助く)とある、また段玉裁も、「詞者意内而言外也、言从口出而氣从鼻出、與口相助、故其字上从自省、下

从口而讀同自」(詞は内に意いて外に言うなり、言は口から出して、気は鼻から出ず。口と相い助く、故に其の字は上は自の省に从い、下は口に从いて、讀むこと自に同じ)と述べているが、この場合の白字は、やはり日字と関係がある。音は些か異なるが、日字の訛形であろう。よって智字の籀文に於ける白字も本来は日であろう。その字素として見える矢は、誓約儀札に用いられるものである。又もう一つの字素として見える于字も、孚などの存在からも解るように雨請いの踊りをおどる巫の姿を象ったものである。つまり智字は、もともと神前において巫が誓いを立て、舞いを踊ることに對して神から与えられた情報が智ということになる。知はその省文と考え、てよいであろう。故に智字の成立は知字の成立より早期であつたに違ひなく、それがこうした文書にも表われているといえる。

(2) 綸は『説文』に、「綸質、布也、从糸、俞聲」(綸質なり、布なり、糸に从ひ、俞聲)とある。綸質は綸帛とも、また綸此とも書かれるもので、漢史遊の『急就篇』に、「服瑣綸帛與繒連」(服瑣、綸帛は繒と連なる)とあり、その顔師古の注に、「綸帛、綸布之尤精者也」(綸帛は綸布の尤精なる者なり)とある。綸は『説文』に、「細布也、从糸、易聲」(細布なり、糸に从ひ、易聲)とあるから、細く織られた布である。これがつまり綸帛と同じものであり、また綸質でもある。綸について徐鉉は、「度侯切」としているから音はトウである。綸は『説文』には無い。『老子、四十一』に、「健徳若綸、質真若綸」(健徳は綸れるが若く、質真は綸るが若し)とある。今、この綸については多くの説があり、綸、輪、掄、搖などである。馬

敘倫は、「今案建當讀爲健、剛健與綸情應」(今、案するに、建は當に健と讀むべし、剛健は綸情と應ず)としている。この『語書』の後文には、「隋(情)」がすぐ応じているから、綸の音を借りてやはり綸か綸を表わしていると考えるのが穩当であろう。隋は『説文』は肉部でとっており、「裂肉也、从肉、从隳省」(裂けたる肉なり、肉に从ひ、隳の省に从う)とある。徐鉉は「徒果切」としているから、音はタである。この『説文』の説解について段玉裁は、「裂肉謂尸所祭之餘也」(裂肉とは尸の祭の餘れるを謂うなり)と注している。『説文』の言う隳というのは、同じく『説文』に、「敗城隳曰隳」(敗れたる城の隳を隳と曰う)としている。しかしここでは、城牆も裂肉も関係はなさそうである。そこで前に掲げた『老子』についての馬敘倫の説のように、この隋を情とれば意味は巧く通づることになる。『玉篇』には、「隋、懈也」とあり、また清の朱駿聲の『説文通訓定聲』には、「隋、段借爲情」(隋は、段りに借りて情と爲す)とある。たまた本書とともに出土した『睡虎地秦墓竹簡・為吏之道』にも、吏有五失……四曰善言隋(情)行(吏に五失有り、……四に曰く、善く言いて行を情たる)の例がある。

(3) 疾事の疾は、『説文』に、「病也、从疒、矢聲」(病なり、疒に从い、矢聲)とある。甲骨文では、疾は人の腋に矢が当っている象形である。康殷はこれに對して、「用以表示外傷如輕病」(これで外傷で軽い病であるようなものを示している)とし、更に、「矢射人最快速、因用以表示疾速、晚周改作疾」(矢は人に射られる時、最も速い、だからそれによってスピードがあるということを表わすの

である。それまで人の腋に矢が当たっていた形のものが、晩周には改められて今の疾の字になったのである」としている。疾にはまた、害、禍の意味もある。『後漢書・文苑傳・傳毅』に、「二事敗業、多疾我力」(二事業を敗り、多く我が力を疾す)とあり、その李賢の注に、「疾、害也」(疾は、害なり)とある。『單行本』ではこの部分に、「疾、憎悪、疾事意為遇事推脱」(疾は、憎悪を表わし、疾事とは事に当って断つてやらないの意を表わす)としているが、この疾はむしろ積極的な負の意味にとった方がよいのではなからうか。

(4) 易口舌、『史記・蘇秦列傳』に、「周人之俗、治産業、力工商、逐什二以爲務。今子釋本而事口舌、困、不亦宜乎」(周人の俗は、産業を治め、工商に力め、什二を逐うて務と爲す。今子は本を釋して口舌を事とす)とある。口舌とは口先の辨説という意味である。ここでは口で言う事をそのつど変えて一定せずの意である。

(5) 辱は『説文』に、「恥也、从寸在辰下、失耕時、於封置上戮之也、辰者農之時也、故房星爲辰田候也」(恥なり、寸に从ひて辰の下に在り、耕時を失すれば、封置上に於て之を戮するなり、辱は農の時なり。故に房星を辰と爲す。田の候なり)とある。楊樹達の『積微居小学述林』に、「字形中絶不見失時之義也……辱字从辰从寸、寸謂手、蓋上古之世、尚無金鐵、故手持摩銳之辱以芸除穢草、所謂耨也」(字形の中にはどうみても時を失うという意味は見当らない。……辱の字は辰と寸に从っている。寸は手を意味する。恐らく上古の世には鐵というものが無かったであろうから、手に銳利にけずった貝殻を持って雑草を取り除いたのである。これがいわゆる耨である。)

ある」と言っている。因みに耨は、ドウと読んで、クワ、クサギルの意である。しかしそれでも、この楊樹達の説明だけでは、辱が何故恥に通じるのかは理解できない。この点を白川靜『字統』は、「これを恥辱・汚辱の意に用いるのは、おそらく黷・𧢲などの仮借であろう」と言っている。『漢字古今音彙』の復原音を参考に掲げておくと次のようである。仮借の音としてお互いに通じているかどうかを見極めるのは些か困難である。しかし辱が本来農事に関する字であり、恥に通ずるのは仮借によるものであるという点は疑いのない所である。

(6) 病人の病は『説文』に、「疾加也、从疒、丙聲」(病い加わるなり、疒に从い、丙聲)とある。前の智と疾の説解からわかることは、疾は軽い病い、病は重い病いを表わすということである。『論語・子罕』に、「子疾病、子路使門人為臣」(子の疾病なり。子路門人をして臣たらしむ)とあり、何晏の集解に、「包曰、疾甚曰病」(包曰く、疾の甚しきを病と曰う)とある。また病には害、損害の意味もあり、『戦国策・東周策』に、「君若欲害之、不若一爲下水、以病其所種」(君若し之を害さんと欲さば、一たび水を下すことを爲すに若かず、以って其の種えし所を病す)とあり、これは重病の病いの

	カールグレン 中古音	カールグレン 上古音	周高法 中古音	周高法 上古音	徐鉉の音
辱	niuk	niéiuk	njewk	niuk	而蜀切
黷	d'uk	d'uk	dewk	duk	徒谷切
𧢲			niəwk	niuk	女六切

意味ではない。

(7) 公端の端は、上文に已に見える、「矯端民心」の端と同じで、秦王改の名を諱んで正の代りに端を用いたのである。

(8) 冒抵の冒は『説文』に、「冢而前也、从月目」(冢して前むなり、月と目に从う)とある。冢は同じく『説文』に、「覆也、从冢」(覆ふなり、冢と冢に从う)とある。更に月について『説文』は、

「小兒及蠻夷頭衣也」(小兒及び蠻夷の頭衣なり)とある。これに段玉裁は注して、「謂此二種人之頭衣也、小兒未冠、夷狄未能言冠、故不冠而月」(此の二種の人の頭衣を謂うなり。小兒にして未だ冠せざるもの、夷狄にして未だ能くせざるものは、冠を言っても冠せずして月す)という。冢は冢字の上に頭衣を冠しているから覆の意である。故に冒は、頭を頭衣でつつんで前むのである。抵は『説文』に、「擠也、从手、氏聲」(擠なり、手に从い、氏聲)とある。擠を同じく『説文』で見ると、「排也、从手、齊聲」(排なり、手に从い、齊聲)とあり、今度は排を『説文』で引くと、「擠也、从手、非聲」(擠なり、手に从い、非聲)とあって、擠字と排字とは互訓となっている。擠は『広雅』に、「擠、推也」(擠は推すなり)とあり、

「正字通」にも、「擠、推之使墜也」(擠は之を推して墜しめるなり)とある。また『史記・項羽本紀』に、「漢軍卻、爲楚所擠」(漢の軍卻ぞき、楚に擠さるる所と爲る)とあり、その裴駰の集解に、「瓚曰、

排擠也」(瓚曰く、排擠するなり)とある。また排は、『廣雅』に、「排、推也」(排は推すなり)とあり、また『禮記・少儀』に、「排闥説」(闥は戸内者、一人而已矣) (闥を排して戸内より脱履す

る者、一人のみ)とあり、その孔穎達の疏には、「闥謂門扇、謂排推門扇脱履於戸内者一人而已矣」(闥は門扇を謂うなり。門扇を排推して、戸内より脱履する者一人のみを謂う)とある。つまり、抵は推しておとしめるの意である。前の注に掲げた冒は、『国語・晉語』に、「有冒上而無忠下」(上を冒すもの有るも、下に忠なるもの無し)とあり、その韋昭の注には、「冒、抵觸也」(冒は抵觸するなり)とある。ここに言う冒抵とはともにおかしおとしめるの意と考えてよい。

(9) 訴は『説文』に、「告也、从言、斥省聲、論語曰、訴子路於季孫、訴或从言朔、訴或从朔心」(告ぐなり、言に从う、斥の省聲、論語に曰く、子路を季孫に訴うと、訴は或いは言と朔に从う。訴は或いは朔と心に从う)とある。後半に言う「或从言朔、或从朔心」というのは『説文』に掲げられた或体字の中にそれがあるからである。その場合、斥の中の干或いは下が朔字の左字と見られているのである。これについて段玉裁は、「凡從辟之字、隸變為斥、俗又為斥」(凡そ辟に従う字は、隸では變じて斥と為り、俗では又斥と為る)と述べている。朔は『説文』に、「不順也、从干、下少朔之也」(順わざることなり、下の少は之に朔するなり)とあって、逆、つまりさからう、むかえるの意である。そうすると訴は、下から上に言上すること、或いは言葉で向えうつこと、言い争うことの意であろう。

通釈

悪吏は、法律令をあまりよくは理解していないし、物事の善悪もわからず、また清廉潔白でもない。また上司を補佐するということ

もせず、なまけおこたって、物事をとどこおらせて害してしまうのである。また口先でいいかげんなことを言って恥をはじとも思わない。軽がるしく人を悪しざまに罵りて侮辱し、公明正大な心を持っていない。また上を冒し行政を攪乱させるのである。更に人とよく言い争いを起し、事務的处理に当たっても何かと争い事を起すのである。

十一、争書、因恙(佯)瞋目扼掎(腕)以視(示)力。

書を争うは、恙⁽¹⁾(佯)⁽²⁾に因りて、瞋目扼腕⁽³⁾し、以て力を示す。

(1) 恙は『説文』に「憂也、从心、羊聲」(憂いなり、心に从い、羊聲)とある。段注に、「古相問曰不恙、曰無恙、皆謂無憂也」(古相問いて曰く、恙^{うれ}ざるかと、曰く恙^{うれ}無しと、皆な憂い無さを謂うなり)とする。徐鉉は、音を「余亮切」とするからヨウである。この字は仮借で羊は音符であり下部の心がその意である。この羊音は、憂などの音とも通づるのである。しかしここではこの恙が憂では意味がとれない。『史記・刺客列伝』の司馬貞の「索隱」に『易傳』を引いて、「上古之時、草居露宿。恙、齧蟲也、善食人心、俗悉患之、故相勞云、無恙」(上古の時、草居し露宿す。恙は齧蟲なり、善く人心を食す。俗に悉く之を患う、故に相い勞して云うに、恙無くと)とある。この中の「善食人心」から佯の意味が引伸されたのである。佯字は『説文』にはなく、その成立は可成り後代である。

うが、恙字自身の中に、当初より佯の意味があったはずである。『孫子・軍争』に、「佯北勿從」(佯北には従うこと勿かれ)とあり、これは敗北をよそおった敵を追って行つてはいけないということである。つまり佯はいつわりである。

(2) 因は『説文』に、「就也、从口大」(就くなり、口、大に从う)とある。段玉裁は、「就下曰就高也、爲高必因丘陵、爲大必就基趾、故因從口大、就其區域而擴充之也」(就の下に曰く、就高なりと、高きを爲すには必ず丘陵に因り、大を爲すには必ず基趾に就く、故に因は口と大に从う。其の區域に就いて、之を擴充するなり)と注している。康殷は、「象人仰臥在褥上之狀、概即『詩・秦風』「文茵暢轂」的茵本字、後又作網、輶、網(人が褥の上に仰けてねている形、おおむね詩経の秦風、「文様のしきかわに、長い轂」という時の茵の本字である、後に網、輶、網などと書かれるようになった)といつておりこの説は興味を持たれる。敷物の上に人間が寝ている所から「就く」の意が生れたというのも理解出来る。そうすると音的に、引、印、陰などとの関連が想像される。

(3) 瞋は『説文』に、「張目也、从目眞聲、眦、祕書瞋从戊」(目を張るなり、目に从い眞聲、眦は祕書の瞋、戊に从う)とある。『莊子・秋水』に、「鵲鵲夜撮蚤、察毫末、晝出、瞋目而不見丘山」(鵲鵲は夜蚤を撮り、毫末を察するも、晝に出づれば、目を瞋るとも丘山を見ず)とあり、瞋目は、目を大きく見張ることであろう。

(4) 扼掎(腕)の扼は『説文』には搗でとつてあり、「把也、从手、鬲聲、掎、搗或从扌」(把なり、手に从い、鬲聲、掎、搗或いは扌

に従う) という。段玉裁は注して、「今隸變作扼、猶輓隸變作輓也。許云扞者攝之或字、而鄭注『禮』云攝、扼也者、漢時少用攝、多用扼、故以今字釋古字」(今隸は變じて扼に作る。猶お輓の隸は變じて輓に作る) ときなり。許云う扞は、攝の或字なり。而るに鄭が『禮』に注して、「攝は扼なり」と云うは、漢時攝を用いること少く、多く扼を用いる。故に今字を以てて古字を釋すなり」と述べている。指は『說文』に、「掐指也、从手、官聲、一曰援也」(掐指なり、手に从い、官聲、一に曰く援なり) とある。これに段玉裁は注して、「指乃複舉字、誤移掐下耳、義理與扶略同、今人刺字當作此、大徐附劓於刀部非也」(指は乃ち複舉の字なり、誤りて掐の下へ移すのみ。義理は扶と略は同じ、今人刺字を當に此に作るべし、大徐が劓を刀部に附するは非なり) という。即ち下の指の字は衍字であるとする。また段注には、指の音を、「鳥括切」としているから音は、ワンである。つまり指は劓と同じ音である。『戰國策・燕策三』に、「樊於期偏袒扼腕而進曰、此臣日夜切齒拊心也、乃今得聞教」(樊於期偏袒扼腕して進みて曰く、此に臣、日夜切齒拊心するや、乃ち今教を聞くを得) とある。この場合は扼腕であるが、『語書』の「扼指」も、

音としては「扼劓」と同じであり、つまり「扼腕」と考えられるであらう。

通釈

事務処理に於ても物議をかもし出しては、うそいつわりをほしいままにし、相手をにらみつけたり、腕をつかんだりして暴力的な強さをみせつけて、相手を屈服させるのである。

受受不...
...
...
...
...
...
...
...
...
...

(一九九三年十二月十七日受理)